



瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



主日の説教

今日のみことば

年間第28主日 B年(2021年10月10日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：知恵の書 7章7—11節

第二朗読：ヘブライ人への手紙 4章12—13節

福音朗読：マルコによる福音書 10章17—27節

テーマ：神の知恵、人の(小賢しい)知恵

三つの朗読から

第一朗読の9節に注目しましょう。「どんな宝石も知恵にまさるとは思わなかった。知恵の前では金も砂粒にすぎず、知恵と比べれば銀も泥に等しい」と新共同訳にはあります。フランシスコ会訳をみると、「わたしはそれをいかなる宝石と比べたこともない。知恵の前ではあらゆる黄金も一握りの砂にすぎず、知恵の前では銀も泥に等しい」とあります。知恵を他の何か宝物と比べるのもおこがましいというニュアンスが現れています。知恵と比べると宝石も黄金も銀も価値がないのです。

第二朗読の冒頭「神の言葉」はみことばが人となったイエス・キリストを指すと考えてもよいですし、旧約の時代に神が様々な形や方法で人間に語りかけた、その言葉を指すと理解してもよいでしょう。いずれにせよ、神のことは生きていて、力がある。人の思いを見分け、識別することができるのです。「神の言葉」を受ける人間は、神の前に立たされる存在です。「裸」はギリシア語ではギムノスですが、「裸の、むき出しの」の意味と、「貧しい身なりの」という意味があります。さらに第三の意味として「覆われていない、あらわな」があります。本節では第三の意味だと考えてよいでしょう。神は、外見を装っても、人間の裸の心を見通します、見抜きます。

福音朗読では男が「善い先生」と呼んだ理由は不明です(18節)。お世辞かもしれませんが、真心からの言葉だったかもしれません。いずれにせよイエスさまは自分が「善い」と呼ばれることを拒否します。なぜなら、善いお方はただ一人、天の御父だけだからです。イエスさまは神の意志を求め、それに絶対的に従うという基本姿勢を貫き通します(14章36節参照)。

説教

今日の福音で「善い先生」と呼びかけられて、イエスさまは「神のみ言葉」（いわゆる十戒）を引き合いに出して大切な掟を教えます。これは、イエスさまにとって神の意志に従うことがもっとも大切なことでしたから当然なことです。しかし、イエスさまは、神の掟を自分の言葉で置き換えているようです。まず、十戒の後半部分だけを引き合いに出します。前半の戒めを無視しているわけではないでしょう。神への愛と隣人への愛は分かたれないからです。それから「隣人の家を欲してはならない」（出20章17節）を「奪い取るな」と置き換え、「父母を敬え」を最後に持ってきています。こんなイエスさまの答えに、男はもはや「善い」という形容詞を使いません。男の心変わりが透けて見えます。「そんなこと、子どもの頃から守ってきた」という自負からくる心変わりでしょうか？ イエスさまは男を見つめ、慈しんで語ります。「慈しんで」はフランシスコ会訳では「愛情をこめて」となっています。エーガパーセン（アガパオー）は「愛した」という意味です。ですから、イエスさまがこの男に向かって、馬鹿にしたようなまなざしを送ったのではないことが想像されます。むしろ、彼を助け、救いに導き入れようとしたのではないのでしょうか？ それで、欠けている「一つ」のことを伝えます。それは、貧しい人に所有物を売って貧しい人に施し、その後でイエスさまに随従することです。施しをするのは宗教的、道徳的な徳に優れた行為でしょう。しかしそれが、すべて売り払い、無一文で行われるためには、自分のあり方を天（神）に求め、神中心に生きようとしなければできないのです。22節で財産と訳されている言葉はクターマタですが、複数の土地という意味もあるそうです。この男は大地主であったのかもしれませんが。財産という富のおかげで男は小賢い人の知恵にとらわれます。しかし、イエスさまが求めているのは神さまにたよって、神さまからいただいていく神の知恵です。興味深いことに福音書の中でイエスさまに追従することを拒否したのはこの男だけです。信仰にとって富からくる人間の知恵の危険性を警鐘しているかのようです。

26節の「だれが救われるのだろうか」という弟子たちの反応は至極当然のように思えます。なぜなら、当時のユダヤ人にとって財産は神の祝福のしるしだったからです。しかし、イエスさまは財産があれば、自分の財産を頼りにしてしまう人間の弱さに焦点をあてています。財産を得るにはこの世の知恵が必要です。その結果、神の知恵に頼らなくなり、神に信頼する生き方を見失うのです。